

## マウスを用いたグリスリンの急性経口毒性試験(概要)

■試験目的: 検体について、OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 401(1987)に準拠し、マウスにおける急性経口毒性を調べる。

■実施機関: 日本食品分析センター

■検体、他: グリスリン (性状: 水溶性パウダー)  
検体を純水に懸濁し、100mg/ml の試験液を調製した。

■試験動物: 4 週齢の ICR 系雌雄マウスを日本エスエルシー株式会社から購入し、約 1 週間の予備飼育を行って一般状態に異常のないことを確認した後、試験に使用した。試験動物はポリカーボネート製ケージに各 5 匹収容し、室温 23°C±2°C、照明時間 12 時間/日に設定した飼育室において飼育した。飼料[マウス、ラット用固形型飼料; ラボ MR ストック、日本農産工業株式会社]および飲料水(水道水)は自由に摂取させた。

■試験方法: 試験群および対照群ともに雌雄それぞれに 10 匹を用いた。  
投与前に約 4 時間試験動物を絶食させた。体重を測定した後、試験群には雌雄ともに検体投与量として 2,000mg/kg の用量を胃ゾンデを用いて強制単回経口投与した。対照群には雄では 0.7ml、雌では 0.6ml の純水を同様に投与した。  
観察期間は 14 日間とし、投与日は頻回、翌日から 1 日 1 回の観察を行った。投与後 7 および 14 日に体重を測定し、t-検定により有意水準 5% で群間の比較を行った。観察期間終了時に動物すべてを剖検した。

■試験結果: ①死亡例 雌雄ともに観察期間中に死亡例は認められなかった。  
②一般状態 雌雄ともに観察期間中に異常は見られなかった  
③体重変化 個体別にみると、投与後 14 日の体重測定において雌の対照群の 1 例で体重減少が見られた。しかし、群間比較においては投与後 7 および 14 日の体重測定で雌雄ともに体重増加に差は見られなかった。  
④剖検所見 観察期間終了時の剖検では、雌雄ともにすべての試験動物の主要臓器に異常は見られなかった。

■考察: 検体について、2,000mg/kg の用量では死亡は認められず、剖検時にも異常は見られなかった。したがって、検体のマウスにおける単回経口投与による LD50 値は、雌雄ともに 2,000 mg/kg 以上であるものと考えられた。

■資料提供: 株式会社サン・メディカ